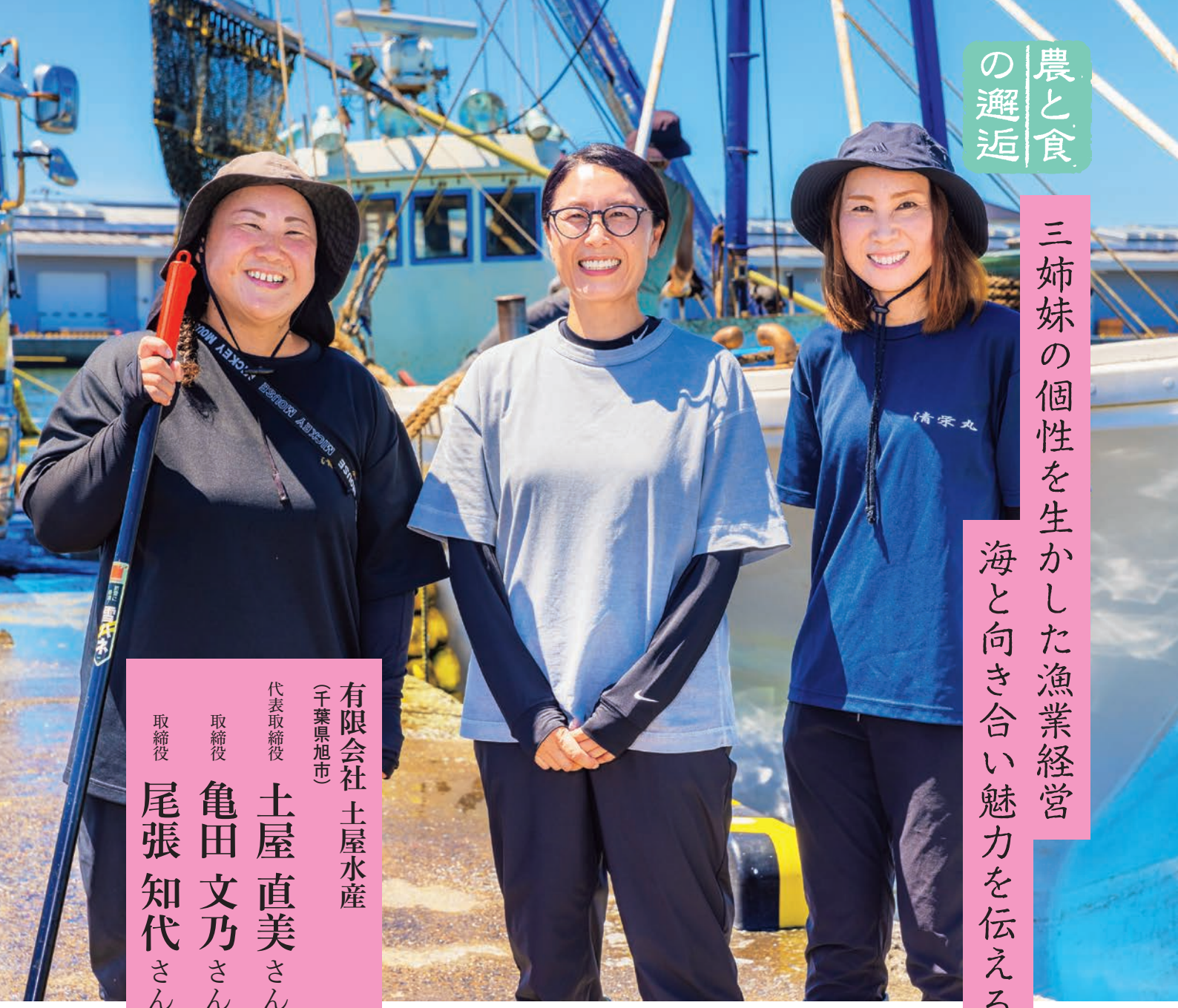

農と食の邂逅

# 三姉妹の個性を生かした漁業経営
## 海と向き合い魅力を伝える

有限会社 土屋水産
（千葉県旭市）

代表取締役 土屋 直美さん
取締役 亀田 文乃さん
取締役 尾張 知代さん

### 九十九里のまき網漁船団

千葉県九十九里から銚子の海域は古くから好漁場として知られてきた。土屋水産の清栄丸は、この九十九里で、イワシなどを漁獲するまき網漁船団だ。

取材に訪れた当日は、あいにく雨天のため、清栄丸は出港できず、乗組員は網の手入れに余念がなかった。数十名とおぼしき全員が男性だ。紅一点は土屋直美さん（50歳）。有限会社土屋水産の代表取締役だ。

体育館のように広い倉庫に海老茶色の網が一面に広げられて、それぞれ網針（あばり）という道具を手にしている。

「2枚の網を重ねてつなげて大きな網を作っていきます」と説明してくれるのは土屋正宜さん（50歳）。直美さんの夫で、清栄丸の船長だ。いとこや叔父なども主要メンバーで、外国人スタッフたちも網を囲んでいる。「網を入念に手入れするのが一番大事で、破れたら修理しながら6年から10年くらい使い続けます」

網は、魚種や水深によって目が異なるものを使うから、倉庫には何種類もの網が積んである。広げられた網は、800メートルほどあるそうだ。すごい長さだ！

まき網漁は、この大型の網を輪のように広げて、イワシやサバ、アジなど魚の群れを包み込むように囲み、底を絞って引き上げ、魚を獲る漁法で、土屋水産は、網を2隻の船

に分けて積んで海中に投じる二艘巻きで捕獲する。群れを探す探索船や獲った魚を運ぶ運搬船などとチームを組み、43人の乗組員全員が船団として操業する。

## 陸で活躍する女性たち

直美さんは、土屋水産の4代目だ。祖父が亡くなった中学校1年生の時に「次はお前が継ぐんだから」と父に言われた。3人姉妹の長女で、幼いころから後を継ぐものと思い込まされてきたと振り返る。

「そうなんです。姉は真面目だし責任感が人一倍強いんです」という次女の亀田文乃さん（47歳）と三女の尾張知代さん（45歳）。

文乃さんは、海と父が大好き。

「小さいころから父にくっついては船や造船所を見に行ったり、網倉庫で父の隣に座って仕事を見ていました」

高校卒業後、専門学校を経て都内で暮らしていたが、姉と妹の出産が重なって、実家へ戻ってきた。以来、水揚げを担当。朝7時のせりに間に合うように港へ通う。

「船に乗りたいくらい海が好きなんです。でも昔からの慣習で、女性は乗せてもらえないんです。縁起を担ぐ商売なので」と。

「根っからの海好きで、漁師という職業に、一番熱い思いを持っているのが文乃です」と直美さんが言う。

三女の知代さんは、3人の中で一番先に結婚した。父からは「お前たちのダンナは漁師を継がないといけない」と言い渡されて、夫の尾張正己さん（46歳）は結婚と同時に漁師になり、現在は清栄丸の漁労長。直美さんの夫も醤油会社勤務から転じたのだ。

姉2人によると「知代は、上を見て育っているから世渡り上手。でも芯は強い」と。そんな評価も、淡々と聞き流す知代さんは、結婚前から事務を手伝ってきた。今は、従業員の雇用関係書類の作成から経理全般、給与管理まで事務作業を担う。

「一番大変なのが給与管理です。歩合制で水揚げごとに変わるので、誤りがないように注意して計算します」

清栄丸の乗組員だけで43人。さぞ大変なことだろう。

そもそも、3人で分担して経営するスタイルは、直美さんの着想で始まった。

「昔は、母が一人で事務も現場もやってい

P17：漁から戻ってきた清栄丸を三姉妹でお出迎え。右から三女の尾張知代さん、長女の土屋直美さん、次女の亀田文乃さん
P18：「入梅いわし」をいっぱいに積んだトラック（左上）　身が太って、1年で最も脂がのっておいしい「入梅いわし」が、きらきら光る（上段右）　網倉庫で、新しい網の準備や手入れをする清栄丸の乗組員たち（中段右）　直美さん（最前列の左から3番目）を囲んで、乗組員たちと（下）

ましたが、今は書類の申請をはじめあらゆる業務が複雑。私一人では、とうてい無理なので妹たちと協力することにしました」

九十九里での女性の活躍は今に始まったことではなく、江戸時代からイワシ漁が盛んな当地では「オッペシ」と呼ばれる、陸で漁の手助けをする女性たちがいた。

「岸壁がなかったから、出漁のときは漁船を板の上に乗せて砂浜から海まで押し出して、漁が終われば浜に引き上げたんですって。曾祖父の兄弟の奥さんたちもやっていたそうです」

1965年ごろまでいた「オッペシ」。女性たちは貴重な働き手だったのだ。

## 海への恩返し

そんな歴史を聞いていた直美さんは、経営者としてこの一、二年、漁業の変わり目を、実感しているそうだ。

その一つが、使い終えた漁網のリサイクルプロジェクトへの参加だ。漁網の廃棄には、高額な費用が必要だ。投棄すれば海の有害なプラスチックゴミになる。

漁網は切り刻まれてネットプラスといわれる素材へ加工される。織り上げられた生地は、若者に人気があるアウトドアブランドの帽子やジャケット、ハーフパンツへと生まれ変わる。

「リサイクルによって自分たちの仕事が何かにつながっているという誇りが生まれるといいと思っています」

直美さんが言葉を継いだ。「洋服が完成したら、乗組員に着てもらえるのが楽しみです」

魚を獲って生活を潤してくれた網だ。みんなのモチベーションも上がることだろう。

「これが若者に漁業のよさを伝える一つのきっかけになり、就職先のアピールポイントにもできたらなと思っています」

漁業界で直面している大きな問題が、若者の担い手不足だ。漁業の情報が彼らには届きにくい。漁師という職業の実態を知らない若者が大半だと嘆く。

「例えば、二艘巻きは、毎日家に帰れるし、正月休みや祝日もあります。仕事の選択上、是非とも知ってほしいことです」

2025年度に、千葉県旋網漁業協同組合が大学の企業説明会にブースを出展する予定なので、土屋水産も参加したいという。

23年に改正された「漁港及び漁場の整備等に関する法律」によって、地域資源の有効活用などを推進する目的で、水産庁では海業の振興を奨励。25年から、旭市でも海業推進地域協議会が設置され、直美さんはその委員の一人として会議に参加している。

海洋の環境が変わってきており、飯岡漁港の衰退も実感する直美さんは、今、大事なことは海の再生だと感じている。

「私たちは、海に恩恵を受けてきたので、恩返ししたいんです」

「今日は獲れた」と土屋正宜さんと直美さん（上）　魚を積み替え、乗組員と後片付けをする文乃さん（中）　パソコンで数字を精査中の知代さん（下）

漁を終えて船着場に戻る（上）　獲ってきた魚を運搬船からトラックに慎重に積み替える（中）　本社の前で。「昔『オッペシ』はここから船を港へ押し出した」と直美さん（下）

何ができるのか、糸口を模索中だ。

「ただ魚を獲っていればいい、と育った私としては、課題が山積みで勉強も必要なんです。地域の人たちと一緒に考えていけたらいいと思います」

大丈夫。文乃さんや知代さんが、実直な直美さんを応援するため、それぞれの役割を一生懸命担っているのだから。

## 海洋環境の変化への対応

九十九里から銚子にかけては、親潮と黒潮がぶつかることで、好漁場が形成されていたが、２０１７年に黒潮の大蛇行が発生。25年4月に、7年9カ月間続いた大蛇行が終息した。ようやく黒潮が入ってきたのだ。

「海の水の色がまるっきり違うんです」と船長の正宜さん。沖縄の海のように真っ青な九十九里の海が「最近は、潮が濁ってきて、マイワシがいるところがわかる状況にまで回復した。さらに、イワシをエサにするイナダなどの他の魚も入ってくると期待しているんです」とうれしそうだ。

しかし、夏場の適水温は20℃程度だが、今は真夏前からほぼ24℃。

「魚は苦しいと思う」と漁労長の正己さん。

「魚の鮮度を保つために、氷を以前よりたくさん船に準備する必要が出てきました」とさらに続ける正宜さん。漁獲した魚の塩分濃度の兼ね合いを考慮しながら海水を入れるが、どれくらい冷やすべきかと、今まで経験しなかったことに遭遇しているのだ。

全国有数の水揚げ量を誇っていたサバも、以前のようには獲れなくなった。

「海の生態系に大きな変化が起きていることは間違いない」と声を揃えた。

船が出港すると、正宜さんはソナー（探知機）を注視しながら、イワシの群れを探す。ソナーに赤い反応が出れば魚がいる証し。その後は正己さんが、天候や潮流を見極め、最適な網の投入位置を判断するという。

「今までの経験値と勘で判断する。海底の状況によって網が引っかかることもあるし、魚が獲れるかどうかは腕次第。漁労長は、大変な仕事です。感謝しています」と正宜さん。

「網が上がってきて魚が見えると興奮します。大漁のときは特にね。網を破らないように慎重に引き上げます」と正己さん。

「漁獲可能量（ＴＡＣ）が制限されていますが、獲りすぎが原因ではなく、そもそも環境の変化が問題だと感じています」と最後に正宜さんが語った。

「今夜は海に出られそうだ」と船長も漁労長も戸外を見ながら相好を崩した。清栄丸は、深夜から出港し、九十九里沖で操業して、戻ってくるのは明け方にかけてだ。

「明日は大漁だといいわね」と文乃さんが笑った。

（片柳 草生／文　藤井 大介／撮影）